

教科の目標設定に対する特別支援学校教師の意識について

— 肢体不自由特別支援学校における国語・算数／数学の目標設定に関する実態調査から —

小倉 靖範

北海道真駒内養護学校

KEY WORDS: 個別の指導計画における目標設定 教科指導 教師の意識

I 問題の所在と目的

一木・安藤 (2010) は、「日々の指導の見直しに対する困難さ」や「自立活動の指導における個別の指導計画作成上の不安」が、教師の描く指導の展望に影響を及ぼすことを明らかにしている。さらに、これらの困難さや不安は、指導する教育課程に差異はないことを報告している。

これらを踏まえると、個別の指導計画の作成において、各教科の目標設定を行う際も、同様の困難さや不安が生じることが予想された。

そこで、本研究では、肢体不自由特別支援学校において、知的障害者である児童 (生徒) に対する教育を行う特別支援学校の各教科の目標設定を行う上で、教師が感じる困難さや不安等とその背景要因を分析し、教育課程の改善やカリキュラム・マネジメントを検討するための基礎的資料を得ることを目的に実態調査 (2015 年 12 月) を実施した。

II 方法

1. 対象教師

肢体不自由特別支援学校 1 校において、日常的に教科指導に当たっている小学部・中学部・高等部教師、計 80 名。

教職経験年数の構成比は、1~5 年目：20 %、6~11 年：14 %、12~17 年目：15 %、18 年目以上：44 %であった。また、通常学級での教科指導経験者は、23 %が該当した。

2. 対象教科

国語・算数／数学：知的障害者である児童 (生徒) に対する教育を行う特別支援学校の各教科

3. 質問項目

質問項目 (Table 1) については、一木ら (2010) を参考にし、「発達年齢」と「認知の特性」の把握、「指導方法」と「評価」に関する項目を追記した。また、「国語・算数／数学の目標設定を行う際に参考になっているもの」について、選択肢の中から選ぶ (複数回答可) ことを求めた。

Table 1 質問項目 (主なものを一部抜粋)

1. 子どもの実態把握が難しい。
2. 子どもの発達年齢をおおむね把握できている。
3. 子どもの認知の特性について把握できている。
4. 設定した指導目標がこれでよいか不安である。
5. 個別の指導計画に記載された前年度、または前担当者の指導目標は参考になる。
6. 指導目標を達成するための手立て (指導方法) について考えることが難しい。
7. 指導目標を達成したかどうかを評価することが難しい。
8. 長期的な成長を見通すこと (指導の系統性を積み上げること) が難しい。

III 結果

質問項目 1~4 の結果を Fig.1 に示す。国語・算数／数学の「実態把握が難しい」に対し、75%の教師が、「非常にそう思う」・「どちらかと言えばそう思う」と回答していた。同様に、「設定した指導目標がこれでよいか不安である」に対し、59%の教師が何らかの不安を抱いていた。一方で、「発達年齢をおおむね把握できている」に対しては 63%の教師が、「認知の特性について把握できている」に対しては 59%の教師が「非常にそう思う」・「どちらかと言えばそう思う」と肯定的に捉えていた。

また、「国語や算数／数学の指導目標を設定する際に参考になっているもの」について質問した結果を Fig.2 に示す。

この調査では、指導目標を設定する際に、自身の「行動観察」に加え、「保護者からの情報」や「前担任や前指導者からの情報が重視されていた。Table 1 に示した「個別の指導計画に記載された前年度、または前担当者の指導目標は参考になる」に対し、82%の教師が「非常にそう思う」・「どちらかと言えばそう思う」と回答していたことに合致する結果であった。

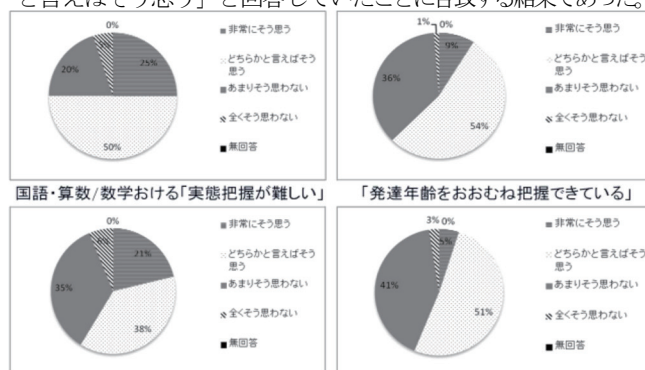


Fig.1 質問項目 1~4 に対する回答 (%)

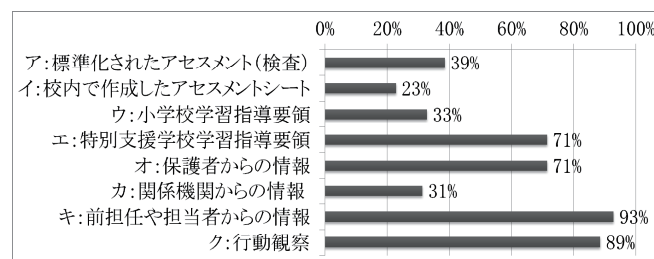


Fig.2 指導目標を設定する際に参考になっているもの (%)

IV 考察

1. 教科の目標設定に対する特別支援学校教師の意識

特別支援学校においては、教師は、大まかな「発達年齢」や児童生徒の「認知の特性」を捉えられていると感じていたとしても、各教科の実態を把握することに対する困難さや指導目標の妥当性に対する不安は残り、苦慮していると言える。

さらに、Table 1 に示した「指導方法」に関しては 60%の教師が、「評価」に関しては 48%の教師が、難しさを感じていた。これらの要因として、目標設定段階での困難さや不安が影響していることも推測される。

2. 個別の指導計画の「引き継ぎ」に着目して

本調査は、一木ら (2010) における「設定した指導目標・内容に確信を持たず、引き継ぎ資料に記された前年度までの指導を踏襲する現状にあるのではないか」という見方を支持する結果であった。「長期的な成長を見通すこと (指導の系統性を積み上げること) が難しい」に対して、74%の教師が、困難さを感じていたことから、見通すことへの不確実性が、前年度の目標や指導を踏襲することにつながっていることが考えられる。

以上のことから、特別支援学校においては、各教科の目標設定を行うにあたり、教科の習得度などをチェックし、目標設定の根拠とできる指標が必要であることが示唆される。

【引用文献】一木薫・安藤隆男 (2010) 特別支援学校 (肢体不自由) における自立活動を主として指導する教育課程に関する基礎的研究—教師の描く展望に着目して。障害科学 34, 179-187.

(OGURA Yasunori)